HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「受け身」教授法の問題点
Author(s)	山下, 好孝
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 1, 1-17
Issue Date	1997-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45547
Type	bulletin (article)
File Information	BISC001_002.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第1号　(1997)

「受け身」教授法の問題点

山　下　好　孝

要　旨

日本語の受け身を教えるに当たっては「直接受け身、間接受け身、有情の受け身、非情の受け身、中立受け身、迷惑受け身、持ち主の受け身、自動詞の受け身」といった用語が多く用いられている。確かに日本語の受け身は西欧諸語の受け身と違った特徴を持っている。しかし、そのその違いを強調するあまり、説明が煩雑になりすぎてはいないだろうか。本稿では日本語受け身文の導入をどのようにしたらよいかを考察する。従来、多く用いられてきた「直接受身」「間接受け身」のペアや、「有情の受け身」「非情の受け身」のペアから導入するのではなく、「口語的な受け身」「文語的な受け身」というカテゴリーで導入することを提案する。前者は「～てもらう」構文との対比において導入する。そして行為者、被行為者の間の関係に「～てもらう」文の恩恵の与え手、受け手の関係と同じものが認められることを観察する。後者の「文語的な受け身」は元の能動文の目的語が主語に昇格した西欧語的な受け身文であることを見る。

〔キーワード〕受け身、テモラウ、教授法

1.　はじめに

日本語教育の指導項目の一つとして「受け身」がある。どの初級の教科書にも受け身の項があり、少なくとも受け身形の形成とその用法について説明がなされている。その説明の中には、普通以下のような用語、概念が用いられている。

1)　直接受け身、間接受け身、有情の受け身、非情の受け身、
　　中立受け身、迷惑受け身、持ち主の受け身、自動詞の受け身、

そして日本語の受け身は英語などの言語のものとはかなり異なり、とく

に「迷惑」の気持ちを表すと言われている。従来の日本語教育では、上に述べた概念が当然のように導入されているのだが、すべてが本当に有用な概念なのだろうか。あまりにも煩雑で、かえって日本語の初級者を混乱させてはいないだろうか。

今までに筆者が初級、初中級で日本語教えた学習者から、「では、一体受け身はいつ、どんなとき使うのか」という質問を何回か受けたことがある。受け身形の形成は理解したものの、その機能的なところまで十分に理解出来ていないのである。[1)]

本稿では受け身の教授法の例をいくつかを取り上げ、その問題点を指摘するとともに、日本語受け身の指導に当たって、どのように導入するのが妥当であるのかを探ることを目的とする。そのためにいくつかの参考書、研究書をとりあげる。それらの論考を元に筆者の現在の受け身導入を最後に紹介する。

2. 先行研究、教授法

2.1 「直接受け身、間接受け身」を手がかりとする教授法

まず東京YMCA日本語学校編「入門日本語教授法」(創拓社1992) を検討する。同書では受け身文をまず「直接受け身」と「間接受け身」に分類する。直接受け身とは、英語などの受け身と本質的に変わらない受け身文であり、元の文の直接目的語が、受け身文で主語に転換されるものを言う。

2) Aが　Bを　殺した。

3) Bは　Aに　殺された。

ただし、次の4)のような文が受け身化されて出来る文5)は一般的ではないとしている。

4)　彼が　コーヒーを　飲んだ。

5) △コーヒーは　彼に　飲まれた。

ただしこの種の文も以下の例に見るように実際には多く使われているとも

指摘している。

6) となりのビルで金庫に入れておいた現金が盗まれた。
7) 上野は桜の名所と言われている。

一方間接受け身文とは対応する能動文から単純に受動文に作り変えられない受け身であるとしている。例えば9)のような受け身文は8)のような文の所有格を主語にして、元の主格を助詞「に」よって示す変形操作をくわえると考える。

8) 女の人が 私の 足を 踏みました。
9) (私は) 女の人に 足を 踏まれました。

しかし10)のような文には対応する能動文がないとする。これはいわゆる「自動詞の受け身文」である。

10) 帰りに雨に降られた。

さらに、間接受け身はほとんどの場合、主格に立ったものが何らかの被害、迷惑を被ったことを表すので「迷惑の受け身」と呼ばれると説明している。

おそらく以上のような説明が多くの日本語の教室で行われていると筆者は推測するが、日本語の受け身を説明するのに、どうして「英語風の受け身」を出発点としなければならないのであろうか。また直接受け身文には「迷惑を被る」という意味が全くないのであろうか。

東京YMCAと同様のアプローチをしている研究に、井口厚夫、井口裕子「日本語文法整理読本」(バベルプレス1994) がある。同書において、直接受け身とは、能動態の目的語を主語にしたもので、英語にそのまま直訳できるとする。

11) 現金が 何者かに 盗まれた。
何者かが 現金を 盗んだ。

ただし、使われる動詞によって行為者を表す格助詞（普通はニ）が変わりうることも指摘している。

12）授受動詞　　：優勝者が市長カラ／ニ花束を渡された。
13）感情に関係する動詞：彼女は多くの人々ニ／カラ愛されている。
14）生産･破壊に関する動詞：この寺は中国の名工ニヨッテ建てられた。

直接受け身は多くの場合、直接被害の意味が付随するが、それは元々の動詞の意味によると指摘する。ただし「褒められる」などは「恩恵」の意味を持つ受け身文となるになるとしている。ではここで言う「被害」というのはいったいどういう意味であろうか。東京YMCAでみた「迷惑」とどう違うのであろうか。さらに、直接受け身には特殊なタイプがあって、「被害」の意味が付随しないものもあるとしている。

15）会議が開かれる。花火大会が行われる。

一方間接受け身文は、主語がある行為、出来事によって間接的な迷惑を被るもので、自動詞も間接受け身に出来、英語の直接受け身には直訳できないと説明している。ここで「迷惑」という言葉を使っているが、「被害」との差は明らかではない。間接受け身の例としては

16）母親が子供に泣かれた。

が挙げられている。さらに間接受け身の特殊なタイプとして「持ち主の受け身」の例を示している。

17）私は足を踏まれた。

たしかに16)では母親に子供に「間接的に迷惑を被っている」と言えるかもしれないが、17)では「私」はほぼ「直接的な被害」を被っている。17)の文は次の直接受け身文18)とほとんど被害のニュアンスでは変わらないのではないだろうか。

18) 私は踏みつけられた。

以上、「直接受け身」と「間接受け身」に関する意味の曖昧性について指摘してきた。特に「被害」と「迷惑」という概念が不明確であった。日本語教育で受け身を導入する場合、これらを出発点とすることには問題があることを強調したいと思う。

2.2 「有情の受け身」と「非情の受け身」を中心とする教授法

川口義一他「日本語教育チェックブック」(バベルプレス1994) ではまず能動文と受動文の８つのペアを検討している。

19) (1)a　太郎が　次郎を　なぐった。
　　b　次郎が　太郎に　なぐられた。
　(2)a　犬は　太郎に　かみついた。
　　b　太郎は　犬に　かみつかれた。
　(3)a　太郎は　次郎に　時間を　聞いた。
　　b　次郎は　太郎に・から　時間を　聞かれた。
　(4)a　太郎は　次郎と　絶交した。
　　b　次郎は　太郎に・から　絶交された。
　(5)a　犯人は　花子から　ハンドバッグを　奪った。
　　b　花子は　犯人に・から　ハンドバッグを　奪われた。
　(6)a　太郎は　花子の　日記を　読んだ。
　　b　花子は　太郎に　日記を　読まれた。
　(7)a　子供が　２時間も　泣いた。
　　b　わたしは　子供に　２時間も　泣かれた。
　(8)a　父が　門を　しめた。
　　b　わたしは　父に　門を　しめられた。

さて、これら８つのペアを検討して、どれが「直接受け身文」だと考えられるであろうか。同書では次の三つの考え方が可能だとする。直接受け身の範囲を広く取るか狭く取るかによって定義が変わるというのである。

20) Ａ説　(1)b

B説　(1)b (2)b (3)b
C説　(1)b (2)b (3)b (4)b (5)b (6)b

なお(6)aからは(6)cのような受け身文も形成でき、それはA説の直接受け身に相当する。

21) (6)c　花子の日記は　太郎に　読まれた。

このように直接受け身の定義付けが一元化出来ないので、同書では、「有情の受け身」と「非情の受け身」という分類を最初に立て、日本語の受け身の説明をしている。

「有情の受け身」とは、特に「人」を主語とする受け身で、迷惑の意味を表すことが多いとする。中でも狭義の間接受け身[2)]は、常に迷惑の意味になると主張している。

22) わたしは子供に2時間も泣かれた。

他の有情の受け身は、迷惑の意味にもそうでない意味にもなるとする。迷惑の意味になるか　否かは、個々の動詞の意味によるとして、構文的な意味の違いは考慮に入れていない。

23) 次郎は太郎になぐられた。
　　次郎は太郎に助けられた。

「非情の受け身文」の主語は、対応する能動文のヲ格であると定義する。英語などいくつかの外国語と同じ発想をもつため、有情の受け身よりも外国人にわかりやすいといわれる。感情のない　モノ・コトを主語とするので話し手の感情を表すことがほとんどなく、客観的な意味を表すと同書では説明している。

24) a　樋口一葉が『たけくらべ』を書いた。
　　b　『たけくらべ』は　樋口一葉によって　書かれた。

ただし、非情の受け身でも、まれに迷惑の意味になることがあることも説明に加えている。

25) うちの窓ガラスは、お隣の太郎ちゃんに3枚も割られた。

「有情の受け身」は日本語本来の受け身文で、「非情の受け身文」は西欧語の影響によって生まれたとよく言われている。しかし、この区別によっても意味の差がはっきりと表せないとなると、かえって学習者に混乱を招くだけではないだろうか。また主語が人である「有情の受け身文」でも物が主語になる「非情の受け身文」に大変近いものも存在する。

26) ケネディーはオズワルドによって殺害された。

後の章でこの文に関してさらに考察を加えたいと思う。

2.3 言語学的なアプローチ

ここまでの2節では日本語教育における受け身文の扱いを見てきたわけだが、言語学の観点からどのようなアプローチがなされているのだろうか。最初に工藤真由美「現代日本語の受動文」(ことばの科学4、むぎ書房1990)を検討する。同書では主に書き言葉からデーターを収集し、受け身文を分類している。そして、次のような表にまとめている。

27) 2つのタイプの受動文

A「当事者受動文」
　A．1「直接受動文」
　　A．1．1「直接対象受動文」
　　①花子が（太郎に）殺される－太郎が花子を殺す
　　②ロープが切られる－太郎がロープを切る
　　A．1．2「相手受動文」
　　①花子が（太郎に）かみつかれる－太郎が花子にかみつく
　　②花子が（太郎に）手紙を渡される－太郎が花子に手紙を渡す
　　③花子が（太郎に）罰金をとられる－太郎が花子から罰金をとる

A．2「間接受動文（持ち主受動文）」

A．2．1

①花子が（太郎に）子供を殺される－太郎が花子の子供を殺す

②武蔵が（敵戦闘機群に）舵機を壊される－敵戦闘機群が武蔵の舵機を壊す

A．2．2

①花子が（太郎に）顔に墨をつけられる－太郎が花子の顔に墨をつける

②花子が（太郎に）頭から水をかけられる－花子が太郎の頭から水をかける

B「関係者受動文（不利益受動文）」

①花子は太郎に死なれる－＊太郎が花子に死ぬ　（太郎が死ぬ）

②花子は太郎に酒を飲まれる－＊太郎が花子に酒を飲む（太郎が酒を飲む）

要約するとAは対応する能動文があるもの、Bは対応する能動文がないもので、純粋に構文的な基準で受け身文を大きく二つに分類しているのである。しかし、日本語教育の立場からするとA．2とBが同じグループに入れられ、「迷惑受け身」の代表的なケースを形成しているとみなされる場合が多い。意味より機械的な構文を優先したアプローチは日本語教育には有意義なのだろうか。また、データー収集に際して、書き言葉と話し言葉を一律に扱ってもいいものなのだろうか。こういった点で疑問が残る。

言語学的な観点から意味的なアプローチをしたものに、高見健一「機能的構文論による日英語比較」（くろしお出版1995）がある。同書は最終的に受け身文の適格性を説明するには、「インヴォルブメント」、「特徴づけ」、「被害／恩恵」という3つの要因と「共感度関係」に基づく分析が不可欠であると主張しているのだが、分析の出発点で、興味のある指摘をしている。

日本語の受け身の分析では、意味上、「中立受け身文」（neutral passive）と「被害受け身文」（adversative passive）と呼ばれる2種類の受け身文がある。

28）a．僕は先生に褒められた。

b．プレゼントがみんなに喜ばれた。
c．遭難者は全員、救助隊に助けられた。
d．太郎は次郎に「兄貴」と呼ばれた。

29) a．僕は子供に泣かれた。
b．店長は大売り出しの日に、従業員３人に休まれた。
c．私は母に日記を読まれた。
d．太郎は奥さんに着物を買われた。

28)が中立受け身文で、29)が被害受け身文であるという意味上の相違に加え、両者には構文上の相違もある。つまり、28)の中立受け身文には、それに対応する能動文が存在するが，(7)の被害受け身文には、それに対応する能動文が存在しない。

ここで、「中立受け身文＝対応する能動文が存在する受け身文＝直接受け身文(direct passive)」、「被害受け身文＝対応する能動文が存在しない受け身文＝間接受け身文（indirect passive)」と定義する。

しかし、上の定義にも関わらず直接受け身文でも、被害の意味を持つ場合があることを指摘している。

30) a．佐藤先生は、ハワイ大学を辞めた。
b．ハワイ大学は、佐藤先生に辞められた。

また間接受け身文でも、次に示すように被害の意味を持たない場合がある。

31) a．僕は、子供を先生に褒められた。
b．太郎は、贈物を先生に喜ばれた。

これらの指摘からも構文を出発点とした受け身の説明は無理があることが分かる。つまり上で述べた「中立受け身文＝対応する能動文が存在する受け身文＝直接受け身文（direct passive)」、「被害受け身文＝対応する能動文が存在しない受け身文＝間接受け身文（indirect passive)」という定義が妥当性を持つ定義とならないからである。高見(1995)自体は、これら

の構文的な分析から離れ意味を中心とした分析に移行しているのだが、そこで提案されている「インボルブメント」や「特徴付け」というのがどこまで日本語教育に有用かは別の機会を設けて論じなければならない問題である。書き言葉、話し言葉に現れる受け身を一括して扱って良いのかという疑問も残る。

2.4 意味からのアプローチ

黒羽栄司「現代日本語文法への１２の提案」(大修館書店1995) は構文の違いにもとづくアプローチを徹底的に批判している。たとえば以下の２文を構文の観点から直接の受け身、間接の受け身として区別する必要はないとする。どちらも主語が「迷惑」を被っているからである。

32) 「太郎は次郎にたたかれた」
「わたしは雨に降られた」

また「迷惑の受け身の」典型的なケースとされる自動詞の受け身であっても、まったく迷惑の意味を感じさせない例文を提出している。

33) 「私は風に吹かれていた」
「母に喜ばれた」

黒羽(1995)と同様の立場に同じ立場に立ち日本語教育での受け身の指導法を説明しているのが、富田隆行「基礎表現50とその教え方」(凡人社第２版1992) と富田隆行「教授法マニュアル70例 (下)」(凡人社1993) である。富田氏は受け身をⅠとⅡの二つに分類し次の様に説明している。
「受け身Ⅰ」はもとから日本語にある受け身で、主語 (主体) は「人」であること。そして、その「人」が他から被害や迷惑を受けて「困った」「嫌だ」と感じたとき、自分のその気持ちを伝えるために受け身の言い方を使って表現する。

34) 「わたしはＡさんにテープレコーダーを壊されました。」

ただし動詞の意味によっては「恩恵」を表すこともある。

35) 「Ａさんは先生にほめられました。」
36) 「ＡさんはＢさんの誕生日のパーティーに招待されました。」

「受け身Ⅱ」は，明治以降、欧文小説の翻訳に多く使われ、それが次第に通常の日本語の表現に取り入れられた受け身であると説明する。

37) 「この建物は、500年前に建てられました。」
38) 「日本語は多くの外国人に学ばれています。」

「受け身Ⅱ」で，行為を行った人が個人であったり、特定の人々であったりして、個人の名前やどんな人々であるかということを言う必要がある場合には「～によって」という言い方で示す。

39) 「アメリカ大陸はコロンブスによって発見されました。」[3)]

黒羽(1995)および富田(1992, 1993)の考え方が現時点では受け身文教授上もっとも妥当なのではないかと考えられる。この考え方に基づき筆者が現在行っている受け身の導入を以下の節で説明したいと思う。

3. 受け身指導への提案

3.1 口語的な受け身

まず受け身を口語的な受け身と文語的な受け身に分類する。口語的な受け身はおおむね人が主語として立ち、他の「人」から被った「被害、迷惑」を表す。これは「恩恵」を表す「～てもらう」構文と対比をなす。たとえば次の文は、花子の受け取り方によって二通りに表現できる。

40) 太郎が　花子の　肩を　たたいた。
→ 花子は　太郎に　肩を　たたいてもらった。
or
→ 花子は　太郎に　肩を　たたかれた。

しかしながら動詞によっては動詞本来の意味に恩恵の概念が組み込まれており、受け身になっても「迷惑」の意味にならないものがある。[4)]

41）僕は先生に家に招待された。＝　僕は先生に家に招待してもらった。

「～てもらう」構文で恩恵の与え手は人間、恩恵の受け手も人間であったのと同様、口語的な受け身文でも迷惑の与え手は人間、迷惑を被るのも人間となる。しかし、自然現象などは一種の「擬人化」を受け、迷惑の与え手の位置を占める場合がある。

42）私たちは雨に降られた。

また自然現象が人間にとって「友好的」である場合には「迷惑」の意味にならない場合もある。

43）そよ風に吹かれながら海岸を散歩した。

日本語では「雨が降る」という現象が否定的に、「そよ風が吹く」というのが肯定的に感じられるので、受け身にもその意味の違いが反映されるのだと考えられる。

次に注目すべき点として、「～てもらう」構文が持つ、恩恵の与え手と受け手の関係が、この受け身文の迷惑の与え手と受け手の間にも成立することがある。つまり、「～てもらう」文の主語はいわゆる「内より」の人間でなくてはならず、同様に口語的な受け身の主語も「内より」の人間になるのである。

44）a．私は彼に家に来てもらった。(恩恵)
　　b．私は彼に家に来られた。(迷惑)

45）a．＊彼は私に家に来てもらった。
　　b．＊彼は私に家に来られた。

さらに、通常授受表現「～てあげる、～てくれる、～てもらう」は受け身の導入よりも先に行われる。もし、そうであるならば先に導入した構文との対比に於いて「受け身」を説明することは経済的であると言える。ただし、授受表現の前者の２構文と、最後の「～てもらう」構文は助詞の選

択に違いがあるため、ここでは「～てもらう」にのみフォーカスを当てるべきである。[5)]

以上のような方法で受け身文が日本語教育においてまず導入されなければならないと考えられる。この種の口語的な受け身を「～てもらう」文との対比によって導入することが重要なポイントである。そして次の節で述べるタイプの受け身文と混同させないことが次のポイントとなる。

3.2 文語的な受け身

つぎに文語的な受け身に移る。これは多くの文法書や日本語教育の参考書によって説明されているように西欧言語の翻訳の影響で生まれた受け身文であると考えられる。従って普通は能動文の直接目的語が主語に変換した「直接受け身」の構文となる。また、行為者は通常「～によって」で表される。[6)]

46)　オズワルドが　ケネディーを　殺した。
　　→　ケネディーは　オズワルドによって　殺された。

また行為者が明示的に表されない場合も多い。

47) ブラジルでは　ポルトガル語が　話されます。

口語的な受け身文が「迷惑を被った行為」を表すのに対し、文語的な受け身文は「～ている」という語尾を伴って「状態」を表すことが多い。

48) この書物は広く読まれています。

文語的な受け身文は前述の口語的な受け身文とは別立てにして教えた方が良いと考える。前者は次のような会話練習で使えるのに対し、後者は読解や作文で重要な役割を担うからである。

49) A：Bさん、どうしたんですか。元気がありませんね。
　　B：ええ、駅に置いておいた自転車を盗まれたんです。

文語的な受け身文では初級の英語の文法練習に見られるような、目的語から主語への単純な変換練習が有効であると考える。

50)　足利尊氏は　　金閣寺を　　作った。

→　金閣寺は　　足利尊氏によって　作られた。

4. おわりに

本稿では口語的な受け身と文語的な受け身の二つに分けて受け身を導入する試みを提案した。ただし、言語は生き物であるから、文語的な要素が口語的な分野に入り込んだり、その逆の現象が起こったりもする。文語的な受け身と言っても、スピーチなどでは頻繁に現れたりもする。

50) 当社の冷蔵庫は広く日本のご家庭で使われております。
　　是非、この機会にお買い求め下さい。

今回の論考では「口語的／文語的」という区別を厳格な定義なしに導入している。我々日本語教師が教室で行っている発話も、ある場合には「口語的」であると言えるし、ある場合には「文語的」とも感じられる。特に、文法などの説明をしているときには使用語彙やスタイルまで文語的になっているのではなかろうか。今回提案した受け身の導入に当たっては、適当なシチュエーションを設定することで「口語的」な受け身と「文語的」な受け身の区別を学習者に理解させる必要があると思う。

以上のような考察に基づき、日本語教育で受け身を導入する教材を開発することが将来の課題であると考える次第である。

注：

1）以下に、筆者が今まで目にした受け身の誤用例を挙げておく。

私は彼によって殴られた。
彼は私に足を踏まれた。
電灯はエジソンに発明された。
私の足は誰かに踏まれた。

構文的な変換規則のみで受け身を導入した場合、このような誤用例が生み出される確率が高くなると思われる。

2）ここでは上記B説、もしくはC説に基づく間接受け身文のことを指していると解釈できる。

3）高見(1995:99)には

アメリカ大陸は、1492年コロンブスに発見された。

という例文が文法的な文として挙げられている。同書は「～によって」文を考察の対象から除外しているのだが、特に書き言葉においては「～によって」を伴う受け身文が多く現れることを考えると、やはり考察に含めるべきだと考えられる。

4）「好く」というような動詞は能動形ではほとんど用いられず受け身形「～に好かれる」という形でしか現れない。この場合も動詞自体が持つ好意的な意味から、受け身にも「迷惑さ」が感じられれない。

5）「AはBを車で家まで送った。」という文から次のような授受構文が生み出される。

AはBを車で家まで送ってあげた。
AはBを車で家まで送ってくれた。
BはAに車で家まで送ってもらった。

そして「迷惑受け身文」を作ってみると

BはAに車で家まで送られた。

となり、助詞の選択は「～てもらう」構文と同じになる。「～てもらう」構文を導入するに当たっては、元の文の動詞が自動詞であるとか、他動詞であるとかは問題にされない。「～てもらう」構文が充分マスターできている学習者にとって、本稿で提案した受け身の導入は大変有効であると思う。

6）「愛する」「尊敬する」などの動詞は「～によって」ではなく、「～から」で行為者を表す。

a）シュバイツアーは多くの人から尊敬された。

上の文で「～に」によって行為者が示される場合もある。

b）シュバイツアーは多くの人に尊敬された。

しかしながら、この「～に」を口語的な受け身の行為者をあらわす「～に」と混同してはならない。なぜなら、文語的な受け身文に現れる「～に」は不特定多数の人を指す場合にしか使われないからである。

c）＊シュバイツアーは花子に尊敬された。

引用・参考文献：

井口厚夫、井口裕子(1994)『日本語文法整理読本』バベルプレス
川口義一他(1994)『日本語教育チェックブック』バベルプレス1994
工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」『ことばの科学４』、
　　むぎ書房　pp 47 - 102
黒羽栄司(1995)『現代日本語文法への12の提案』大修館書店
高見健一(1995)『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版
東京YMCA日本語学校編(1992)『入門日本語教授法』創拓社
富田隆行(1992)『基礎表現50とその教え方』凡人社　第２版
富田隆行(1993)『教授法マニュアル70例（下)』凡人社

Bulletin of International Student Center Hokkaido University No. 1 (1997)

Teaching of the Japanese Passive

YAMASHITA, Yoshitaka

In teaching passive construction of Japanese the following terminology has been used in the class room.

Direct Passive, Indirect Passive,

Adversative Passive, Neutral Passive

Passive with animate subject,

Passive with inanimate subject, Passive of possessor

Passive of intransitive verb

Is it true that all these concepts are useful for Japanese language learners? Are they too complicated to understand the usage of Japanese passive voice?

In this paper, I examine some reference books on Japanese language teaching and finally I propose a new approach to teach the Japanese passive.

First of all, there are two types of passive voice in Japanese: colloquial passive and formal passive. Colloquial passive must be taught along with the TEMORAU construction. This passive has same the restriction as TEMORAU construction concerning the giver and the receiver of adversative influence. Formal passive was introduced in the Japanese language through translations of European Literature. Here there is no meaning of adversativeness.

These two passives should be taught separately. Learners should not confuse these two passive voices in Japanese.